

議事概要（令和2年度愛知県陶磁美術館運営会議）

委員：資料1-2の収支決算について、特別企画展・企画展の計画入館者数と実数に開きがあるが、どのように計画入館者数を設定しているのか。

事務局：過去の同程度の規模の特別企画展・企画展の結果等を基に設定している。

委員：実績との差をどう考えるかが問題と思われる。

事務局：何が足りなかったのか、アンケート調査等で拾い出しながら、次に生かすための改善策を模索しているところである。

委員：アンケート等で、次に見たい展覧会等を確認しているのか。

座長：アンケートでそのような項目も取っている。その上で、展示満足度を計算して施策を立てている。

委員：SNSでもっと若い人たちが陶芸に触れるような発信が必要ではないか。PTAや小学校等にもアプローチし、イベント参加者等に割引券やスタンプカード等を用意しても良いのではないか。コロナ禍だからこそ、次の一手を打ってほしい。バーチャルの体験も一つではないか。今後に期待している。

委員：子どもたちの話が出たが、昨年度実施の「子ども生け花体験」は好事例だ。5歳から中学生までが自分で考えて器を作り、保護者が子どもに直接指示しないように親と子を離れたことが成功につながった。運営側も一切「このように作るように」と指示することなくやった。保護者も満足していたようだ。子どもたちが春の色の花をいっぱい楽しんだ生け花は素晴らしく、とても良い事業だった。このような事業に参加して喜んだ子どもたちや家族は、今後陶磁美術館から心が離れることはないと思う。

委員：当会議では、定量的な振り返りばかりで、定性的な振り返りが無い。お客様の満足度を踏まえずして、本当の振り返りはできない。文化施設は特に定量的のみでは難しく、今後は定性的な振り返りも入れて考えてほしい。

座長：生け花ワークショップをはじめ、陶磁美術館の実施するワークショップはとても面白い。参加者は10~20人程度だが、当日の楽しさをもっと非参加者の人にも伝えていきたい。このような会議の場でも、こうしたワークショップの様子も振り返られるようにしたい。

委員：定期的に子供が創造力を発揮できるワークショップを企画してほしい。かなり前、家族で利用した際にも思ったが、焼きもの体験やワークショップを通して子どもたちは新たな発見が得られる。

座 長：学校からの利用もあるが、稲沢市内の学校から結構来ていただいている。学外授業で遠くへ行っていた学校が、コロナ禍の時期だからこそ、近場の陶磁美術館にて観覧や陶芸体験をできるよう、運営側も色々と考えていく必要がある。

委 員：同一展リピート割は面白い取り組みだが、他館でも実施しているところはあるか。

事務局：他館での実施事例もある。

座 長：前後期で展示替えをする展覧会などでは、特に効果的である。

委 員：平成 26・27 年度の利用者数の落ち込みをどのように解釈するか。

事務局：この時期のベテラン学芸員の退職が、展覧会準備上も影響があった。また、ファンの減少や世代の変化等、もう少し丁寧に対応していかなければならないと考えているが、苦戦をしているところである。若い世代への情報発信も、現在試行中である。

委 員：次年度の特別展・企画展のタイトルはわかりやすくて良い。ただし、展覧会をする場合、大衆向けばかりでも問題がある。ちなみに夜間開館はやっているのか。

事務局：夜間開館は実施していない。

委 員：館の立地的に夜は雰囲気もあり、コンサートやレストラン営業等もして、デートスポットに良いのではないか。時々特別夜間開館をイベントとして実施しても良いのではないか。

委 員：全国的にも、展覧会の入館者はなかなか増加できていない。ナイトミュージアムや陶芸館のような体験型の企画は利用者増が見込める。陶芸館の利用者数が減っているのは痛い。

座 長：陶芸館の利用者数の落ちは、団体利用の減少も要因にある。現在、陶芸館では入っただけでワクワクするような表示の工夫もしている。近郊市町村の学校とのつながりも大事である。展示と陶芸体験が一体となって楽しめる方法を検討している。ナイトミュージアムには、リニモ利用者の安全対策など課題が多い。

委 員：学校側の学外利用は、「遠足」から「校外学習」へと変化している。トヨタ工場など、社会産業の項目と、図画工作の一環として陶磁美術館を利用することをセットとしており、稲沢市としても陶磁美術館は利用価値の高い館となっている。稲沢市では、市内の小学校 6 年生全員が、市内の美術館に行くことになっている。このような強制的な利用が必要なのではないか。まず一回行ってみると、子どもたちや保護者が継続して来館するきっかけとなるのではないか。

委員：情報発信事業の中で、アートディレクターを入れた魅力発信について、もう少し説明がほしい。

事務局：この取り組みは、当館の情報発信力の弱さをアートディレクターと当館にあった方法を学び考えていくのが目的である。その後、職員が効果的な情報発信ができるよう目指す。

委員：もう少し魅力的な伝え方ができる SNS 発信をしてほしい。

委員：アートディレクターは何名か。

事務局：各回 2、3 名来ていただく予定である。

委員：失敗しても良いので、トライ＆エラーで積極的に取り組んでほしい。

座長：やってみなければわからないことも多く、継続的に取り組んでいくことも課題である。最近の例だと、春の辻晉堂展で行われたニコニコ生放送では、約 3 時間の動画で 1 万 5000 人の視聴があった。

委員：ジブリパークとの連携は何かないか。

座長：ジブリパークに来た方が、ストレスなく当館に立ち寄ることができるよう、看板表示等の整備を考えている。それらをはじめとして、日本一のポテンシャルを持つ陶磁美術館をジブリパークと同じ水準までもっていききたい。

委員：三つある。一つは観覧料割引の施策だが、陶芸館の利用をすれば、展示が割引になるなどの制度を作ってはどうか。二つ目は西館を閉館するという話が少し出たが、西館はこま犬館として陶磁美術館特有の特殊な館であり、これは残すべきだと思う。本館にこま犬を移設するとしても、独立ケース等に収めるのはもったいない。三つ目は現状県民茶室「陶翠庵」が閉まっていることである。開いてこそ作家寄贈の茶碗を一般の方が使うという点、展示観覧や陶芸体験の休憩に利用する等の点でも良い意味がある。川崎音三氏寄贈の掛軸の公開等の意味も含め、せっかくの作品が埋もれてしまうのはもったいない。西館及び陶翠庵の価値を考えるべきである。

座長：一つ目の観覧料割引については、昨年度から陶芸館・展示間の割引を検討中である。二つ目の西館については、財政的な問題によるものである。しかし、こま犬の重要性については確かなものであり、その活用には責任・信用性が問われる。これを本館に移設するには、こま犬をしっかり見せ、かつ、大きな驚きを与えられるような、意欲的な展示をすることが前提となる。こま犬移設後の西館については、ワークショップの会場や収蔵庫、重要文化財指定を目指した猿投窯出土陶磁資料の調査室

等、有効な活用方法を考え中である。西館をめぐっては、むしろ攻めていけるような有効な手立てを考えている。三つ目の陶翠庵については、新型コロナウイルス感染症の問題が大きい。何とか復活できるように考えている。また、継続のためには、利用者数の増加に取り組んでいく必要がある。

委員：西館については閉館するべきではない。名称としても西館ではなく、「こま犬館」の方が良いと思う。現在の西館の展示は、こま犬が祈りから生まれたものだというのを念頭に置いた良い展示がなされている。西館はこま犬の館として残すことが極めて大事であり、守っていかなければならない。

座長：財政的な面もあり、西館を継続していけるかをここで確証はできないが、こま犬の重要性を重く受け止め、これから、その活用について取り組んでいかなければならない。

委員：こま犬の中でも、特に良いものを他館にセットで貸して、他館からこま犬のすごさをアピールできないのか。そしてそれを見た人たちが陶磁美術館に来るようなことを狙えないか。

座長：昨年度のインダス展、今年度のノベルティ展等、他の館に巡回展として回せるような所蔵品群がある、こま犬も、その一つとしての十分な魅力のあるものであり、他館を通しての活用も考えていきたい。

委員：ジブリパークとの連携で、日本の伝統的な茶室（陶翠庵）や西館にも行けるようなコース設定も良いのではないか。館の生き残りをかけていくには、これまでの大切なところを守りながらも、攻めていかなければならないのではないか。また、ジブリパークや知の拠点、愛知県大、愛知県芸等、県の施設が集中している地域である。これらの施設とも協力して盛り上げていってほしい。

座長：看板表示の見直しも、コース設定の考え方の一環であり、リニモや車で来る方が、自然に苦勞なく見て回れるような導線の工夫をしていきたい。陶磁美術館を存続していくことは大変なこともあるが、ナンバーワンになれる館として取り組んでいく。見る・作る・使うことで、本物の世界に触れることができ、文化に触れることができるような館にしていきたい。

委員：愛知万博の時にはどれくらいの来館者があったのか。

事務局：自家用車でしか来館できないこともあり、いまひとつアピールできなかった。外国人の来館も思ったより少なく、準備不足の感があった。

委員：ジブリパークに来た人がここに来るとするのは、目的違いで少ないかもしれない。

- 委員：館がここにあることを知ってもらえるような、工夫が重要だ。
- 委員：コンテンツが魅力的なら交通不便地でも来館するのではないか。
- 座長：特別展・企画展の展示の魅力向上は、かなりできてきている。しかし、常設展示の魅力向上はまだまだこれから。嫌な部分を全て廃して、魅力を深めていくことに努力していく。
- 委員：瀬戸市内では、瀬戸蔵ミュージアムに名古屋市内の小中学校を中心に多くの来館がある。陶器・磁器の話や、それら産業の発展について、本物の瀬戸電の中で説明を聞けるのが魅力だろう。子どもたちに本物を見せておくことはとても重要である。瀬戸蔵ミュージアム・陶磁美術館間のバス等についても協力を考えていきたい。特別展・企画展の教育普及講座はすごく面白く、これからの美術館のあり方のヒントになる。これら講座について、しっかりとしたアンケートを取るなどして、結果をまとめていくほうが良い。西館はやはり残してほしい。こま犬の魅力をうまく発信する展示や、SNSによる拡散はできないか。こま犬の日等、設定しても良いのではないか。
- 座長：瀬戸蔵ミュージアムは子供たちには魅力的であり、そのよいところを見習いながら陶磁美術館らしい魅力を高めていきたい。本日は長時間にわたり御審議いただきありがとうございます。